

2017. 04. 26

夜明けの星（短編）

滝沢 無縛

（起）

平太は今、博報大学に向かう途上だった。そこに通っている友人に、ちょっとした用があったのだ。博報大学は京王線のやや郊外の、トンビヶ丘が最寄り駅だった。だがこの辺に土地勘のない平太は徹夜のバイト明けの疲れも手伝って、駅前の近郊地図を見ても行き方がちっともわからない。

もう面倒になった平太はバイトの小銭もあったことだし、タクシーに乗った。タクシーは走り出した、運転手は若い女性のようにであった。「博報大学をお願いします」と運転手に言うと、「博報大学～」と言いながら運転手は車を道の端に寄せて止まった。

「君ねえ、博報大学なら歩いても行けるのよ、一緒に来なさい」、運転手はそう言うのと車を降りて平太の手を取って小走りに走り出した。「ほら、そこに信号が見えるでしょう、あの交差点を右折すると見えてくるのよ」。運転手は平太を交差点まで連れて行くと指さして言った、「あの高い建物、周りが茶色のレンガ塀で囲まれている、あれが博報大学よ」。平太は礼を言いつつ「運賃はいくらですか」と聞くと、「良いのよ、あれくらい」と言ってその運転手は車に戻って行った。

さて平太は用を終えて午後になった。そして友人と別れた後、ポケットの奥をまさぐって白い薄手の手袋をそっと抜いた。午前中に親切にしてくれた運転手さんが、平太の掌中にうっかり忘れていたものだった。平太は何気にその手袋を鼻に充てると、うっすらと若い女性の香りがした。

平太の足は何気にトンビヶ丘の駅の近くにある、先ほどのタクシー会社の詰め所に寄ってみた。さっきの親切のお礼が言いたかったのだ。田舎から出てきて神奈川のはずれにあるBランク大学の文学部を卒業した後も、田舎人特有の要領のなさから就活にも出遅れて今は牛丼屋のバイトをやっている、そんな変に律儀な彼であった。

詰め所を覗くと、大勢のおじさんに交じって彼女は居た。平太は中に入っていくとその女性に、「先ほどはありがとうございました」と頭を下げた。そのいつまでたっても基本動作が抜けないかの態度にその女性は含み笑いをしながら、「あら良いのよ、そんなこと」と返した。およそ運転手には似合わない、あたかも平太と同世代の若い女性であった。そしてここで踵を返せば、すべて終了である。

平太は一生に何回かの勇気を出してさらに聞いてみた、「あのう、今日は何時に上がるのですか。」「今日は早番だから4時よ。」「あのう、駅前のドトールで待っているの、良かったら来てくれませんか。」「ああそう」、単純すぎる返事であったが平太は賭けてみた。

ドトールで4時も30分を過ぎた。「やっぱりだめか、普通そうだよな」、そう思いつつ帰ろうとすると、彼女が店に入ってくるのが見えた。「ごめんね、待った？仕事が伸びちゃって」、そう言う彼女はもはや制服ではなく、ロングスカートに薄手のショールが明らかに平太よりあか抜けていた。

「あ、いや、そんなことないです、さっきはありがとうございました」、一度言ったお礼をまた繰り返す要領のない平太の最大限の歓迎と喜びの言葉であった。「あの、これを返さないといけないと思って」、そう言う平太は彼女の仕事道具である薄手の白い手袋を返そうとした。「あら、いいのに」、彼女にそう言われて平太は思わず引っ込めた。「その手袋をいつまでも持っていたい」、そんな気がしたのだ。

「良かったら一緒に散歩でもしませんか」、コーヒーを飲みながら平太はそう聞いてみた。返事はOKであった。「あのう、お名前を聞いても良いですか」。すると彼女はちょっと首をかしげながら「じゃあアイって呼んで。」「分かりましたアイさん。」「それじゃあ近所の台の山公園に行きましょうか、景色が良いですよ。」

坂道を彼女の後をついて行くと、小山の中腹の「台の山公園」に着いた。確かに市街が見渡せる気持ちの良い場所であった。二人は並んでブランコに腰かけながら、しばらく景色に見とれていた。「アイさんはどうして運転手になったのですか。」「あら、変かしら。」「いえいえ、変とかそう言うことはないのですが、ちょっと珍しいかなと思って。」「まあね、そう言う珍しいことをしてみたかったのかな。」

二人は何気にとりとめもない話をしながら、長い間ブランコに座っていた。「アイさんってもてるでしょう、客に言い寄られたりしませんか。」「無いこともないけど事務的に割り切るしかないわね、特に酔っぱらいは困るの、だから私、仕事の時にはわざとお化粧をしていかないの。」

仕事帰りの彼女は今でも化粧なしだったが、それでも平太には十分に美しく見えた。結構長く居たようで、街の景色は次第に夜景に変わっていった。二人は公園の近くのファミリーレストランに入ると、一緒に夕食を取った。「あの、アイさんのメールアドレス

を聞いても良いですか」「いいわよ、ハイこれ」というと彼女はメモをくれた。平太も自分のアドレスを返したことは言うまでもない。「あの、これからたまには付き合ってもらってよいですか。」「いいわよ。」

平太は天にも昇る気持であった。実に平太のガールフレンド第一号だった。仮に彼女に以前に付き合った男がいたとしても、そんなことはどうでも良いことだった。

* * * * *

（承）

平太はその日、いつになく快活な足取りで自分の下宿に帰ると、今日1日の出来事を回想した。朝は牛丼屋のバイト明けのまま友人をちょっと大学に尋ねただけの単なるニートの兄ちゃん、それが今はメール交換ができる女性ができただ。自分の幸運と「出世」についていけないほどだった。

平太は震える手で早速アイさんにメールをしてみた、「アイさんですか、平太です。今日は色々楽しかったです」。するとしばらくしてレスが返ってきた、「こちらこそありがとう、アイ」。アイさんと言うのが本名かどうかは分からなかったが、とりあえずまだ繋がっていることに安堵した。

それからしばらくの間、平太はアイさんにほぼ毎日メールをした。1日に1～2本なのだが、それは「初めからしつこくすると嫌われるかもしれない」と言う平太なりの配慮だった。それも聞くことは「アイさんはいつも何時に乗務から上がるのですか」とか、「アイさんの好きな食べ物は何ですか」と言った一見ありふれた内容が多かった。例えば「家族構成は」とか「今までの人生は」と言ったプライバシーに及ぶことは、意図的に避けた。田舎者の平太にも、この程度の配慮はできた。

さてそうこうして1月ほどたった後で、平太は思い切ってアイさんをデートに誘ってみた。メールで「明日は非番なの」と返ってきたからだ。返事は「OK」だった。場所は2人の間を取って渋谷にした。ハチ公前で待ち合わせると、平太は映画を見に行きませんかと誘った。面白い映画を知っているというより、「映画は見ているだけなので話題を考えなくて良い」というのが、平太の心の中での真の理由だった。

今度は平太がアイさんを引っ張って渋谷の公園通りを10分ほど歩いて、映画館「ユーロスペース」に連れて行った。初めて会った時には平太は連れていかれるだけだったことを思えば、著しい進歩だ。ユーロスペースはシネコンと異なってインディ系のマ

ニアックな映画の上映館であったが、平太はマニア系の好みであった。田舎者であるだけでなく性格もちょっと癖があり要領がない。だがこれがもてない理由であることに、平太本人はまだ気づいていなかった。

2人は並んで、「平原の草原のナンサ」と言う映画を見た。モンゴルの草原で羊を放牧して、ゲルに住みながら移動して歩く少女ナンサを主人公とした物語だった。ゲルの中とか放牧の様子とか日本人そっくりのモンゴルの少女とか高地の草原の景色とか、平太的には結構楽しめる要素はあった。

2人は映画を見終わると路地を下って道路を渡り、東急百貨店本店隣の「渋谷文化村」に入り、その「ドゥマゴ」と言う軽食喫茶でランチセットを頂いた。ここは先の映画館と違って高級感があり席にも余裕があって、デートにはもってこいと言う感じだった。考えてみたらこの建物の6階にも「ル・シネマ」と言う映画館があって、こちらの方が海外の青春恋愛ものとかをやっていてデート初心者向きだったのだが、平太にそこまでの要領はなかった。

2人は遅めのランチを頂きつつ、それとなく会話をした。今更になってさっきの映画をアイさんが気に入ってくれたかが気になり、「さっきの映画、ちょっとマニアすぎたかな」と聞いた。アイさんは軽く笑って「そんなことないわよ、モンゴルってゆったりしていて良いのね」と答えてくれた。平太はそれが大人のお愛想返事でないことを願った。

するとアイさんは続けて、「モンゴル人ってチベット仏教なのよね。ダライラマを尊敬していて、さっき見た映画でもゲルの中に写真が飾ってあったでしょう」と言う。アイさんは普段は運転手をしているが、実は結構物知りなのだ。文学部出身の平太も知らない知識だった。平太は喜ぶとともに安心し感心した。「この辺の246号線、いわゆる青山通りは良く通るのだけれど、こういう狭くて混んだ街中にはあまり来ないわね」とも言っていた。職業意識だろうか。

ランチはフレンチで、上品なケーキとコーヒーがセットになって付いていた。メインはアイさんがフェットチネで平太は一口ステーキだった。平太は「普段は店の賄の牛丼をタダで食べています」とは、口が裂けても言えなかった。もっともアイさんも仕事柄、普段のランチはファミレスのトーストセット程度なのだが。そのあと同じビル「ザ・ミュージアム」で絵画を鑑賞して、その日は別れた。

そんなことが続いて、日々のメールのやり取りと月1のデートも何回か重ねた。季節も春から夏を過ぎて秋になっていた。それらを通じて平太は「アイさんが結構色々なこと

に興味がある」と知って、サブカルの聖地である下北沢に誘ってみた。こちらの方がアイさんの所に近いし、下北沢だったら「すずなり劇場」とか面白い劇場も多くて、デートにはちょうど良かった。最後に下北八幡宮に行って「願掛け」をする計画だ。この神社は予言者として有名な江原啓之さんが、駆け出しのころに神職をしていた神社である。願掛けの内容に平太の心は決まっていたが、今は言えない。

そんなこんなで日々の牛丼屋のバイトも楽しくなっていた平太の所に、アイさんから突然メールが入った。変な時間帯だったがメールを開けてみると、「平太君ごめんね、今度の下北沢、行けなくなっちゃった。ちょっと事故をしちゃって」とあった。アイさんが事故に遭った、アイさんが事故と言えば交通事故だろう。平太は頭が真っ白になり、思わず持っていた牛肉を掬う網を落としてしまったほどだ。アイさんのけがは大丈夫だろうか、仕事先の対応は……。頭の中かがぐるぐる回ると、平太は人事不省になった。

（転）

アイさんが交通事故とは。平太は目の前が真っ暗になった。だがそんなゆっくりしている暇はない。平太はまだバイトの途中だったが、店長に事情を話しペナルティを支払って、直ちにアイさんが収容されている病院に向かった。

アイさんが収容された聖イグナチオ病院は、川崎市宮前区にあった。場所からしてきっと、業務途中での事故であろう。平太は電車とタクシーを乗り継いで、病院に駆け付けた。病院に着いてアイさんを見舞うと、彼女は幸いに軽症だった。車を回送中にもらい事故にあったとかで、骨折等もなく乗客のけがもなく、打撲傷の経過観察に3日ほど入院する予定だという。やはり駆けつけていたタクシー会社の営業所長の心証も、悪くなさそうだった。

やがて打撲も治癒したと思われる頃、アイさんからメールがあった。「無事に退院したから以前に約束していた下北沢に行こう」というのである。平太の方から誘ったことはこれまでも何回かあったが、アイさんの方から行こうという話が出るのは、考えてみると初めてのことだった。

下北沢についてもアイさんは詳しく、「ここは何年か前にTV番組の『下北サンデーズ』の舞台になったのよね。平太さんはあの番組を見ましたか」と聞いてくる。「見ましたよ、たしか上戸彩が主役だったよね」と答えると、「そう、女の子はたいい『佐々木

蔵之介があの中で1番』と言うのだけれど、私的には古田新太の渋い演技かな」と返してくる。なかなか鋭い観察眼だと感心した。

さて次の週、今度は平太がアイさんを横浜中華街に誘った。下北沢がアイさん寄りだったので、今度は自分の近くでと言う訳だ。実際中華街は平太の庭みたいなものだった。中華街は平日でも人出が多い。先ず中華街を一通り案内したのちに、四五六飯店でこの店自慢の家常豆腐のコースを2人揃って頂いた。

そのあとアイさんに「占いは嫌いか」と聞くと、「興味がある」とのことだったので、やはり昔から知り合いの占い館に連れて行った。「春原先生、こんにちは」「おお平太君、今日は彼女と一緒に、珍しいね、と言うか初めてか。」「いやです先生、からかわないで下さいよ。」「さて今日は何を見て欲しいのかな、聞かずとも決まっているよな、相性と未来だろう、どれ2人とも手を見せなさい」。

春原先生は手相見だが、実際は手相だけでなく身のこなしから話し方に至るまですべてを観察する。そして2人の手をじっと観察すると、「ウーム、全体として悪くないなあ、ほら2人の運命線、これらを見比べて重ねると微妙に絡み合っている、これは相性が悪くないということだ。だが結婚線がちょっとややこしいなあ、一筋縄ではいかず山あり谷ありかもしれないな」。

するとアイさんが「嫌だ、結婚だなんて、そんなことを占わないで下さい」と言うので平太が慌てて、「そういうつもりでここに来たのではないのです、先生も気の回しすぎです」とけん制を入れた。先生も「いやごめんごめん、ちょっと出しゃばりすぎたかな」と、形ばかりの照れ隠しをした。出来る占い師は、客の真の要望まで見抜いてしまうものだ。

そのあと2人はみなとみらい地区に移動すると、コスモクロックと呼ばれる大きな観覧車に乗った。ゆっくり回る観覧車、遠く横浜港の向こうまで見渡せる狭い空間、平太は何気にアイさんの香水の香りに酔いしれていた。その何気ないおしゃれが、アイさんの奥ゆかしい性格を表しているかのようだった。

そしてその時平太は決心した、近いうちに「2度目の勇気」を出そうと。最初の勇気は半年前にトンビヶ丘で初対面の彼女にデートを申し込んだ時だ。そして今度の勇気とは、もちろんプロポーズである。ただ田舎者の平太と都会的センスのアイさん、どう見ても明らかに不釣り合いだった。今まで一緒に遊んでくれただけでも、ほとんど奇跡だった。

次の週、平太は意を決すると、あの始まりの地の台が丘公園にアイさんを誘った。公園はそろそろススキが満開だった。平太は道すがらほとんど無言だった。そしてその張り詰めた空気を、アイさんも何気に気づいているかのようなだった。

公園に着き平太はあの思い出のブランコに座ると、アイさんを隣に目でどうぞと促した。2人で黙ったまま座っていると、平太が思い切ったように口火を切った、「アイさん、あのう、実は僕、アイさんにお願いが、大それたお願いがあるのですが」「あそう、何かしら？」「アイさん、プロポーズします、僕と結婚してください。」

アイさんはちょっと困った顔をしてしばらく下を向いていたが、こう言った、「私ね、平太さんに今まで黙っていたのだけれど……」「私ね、若く見えるけれどももう35歳なの、それにね、以前付き合っていた彼との間に子供までいるのよ、平太さんはまだ25, 6歳でしょう。」

（結）

「私ね、平太さんに今まで黙っていたのだけれど……、私ね、若く見えるけれどももう35歳なの、それにね、以前付き合っていた彼との間に子供までいるの、平太さんはまだ25, 6歳でしょう。」

これにはさすがの平太もあせった。「やっぱりお友達で居ましょう」とかそういうやんわりとしたお断りの返事はあるかなと十分覚悟していたのだが、この返事はいくらなんでも想定外だった。平太から汗が噴き出した。いや汗と言うより涙だったのかもしれない。もはや何だか分からないし、もうどっちでも良かった。

でもここはガキの使いでもなければ会社の商談でもないのだ、「持ち帰って検討します」などと言う答えは直ちにアウトなのだ。でもそうかと言って安請け合いができるような安易なことではない。今すぐこたえなければならぬのだが、頭がぐるぐる回って答えが出てこない。答えは遅い程まずいのだ。

平太はやっとのことでわれに返ると、自分を落ち着かせて答えた、「僕はアイさんが35歳でも構いません、それにその子供も僕が引き取って育てます」。とっさの答えではあったが、彼は決然としていたし、答えを翻すつもりなど毛頭なかった。2人の間にしばしの沈黙が流れた。

「平太さん、本当にごめんなさい。」「いえ良いのです、良く言ってくださいました。」「そうじゃないの平太さん、私あなたを試しちゃったの、いけないことをしてごめんなさいね、でも女の子ってそういうものでしょう……。」「ええ！そういうものって？」

「私本当は28歳なの、それに子供なんて居ないの、昔ちょっと付き合った彼は居たけど」。平太は何が何だか分からなくなってきた。でもアイさんの顔は今の方がずっとまじめだ。そう言うことか、平太はやっと事態を飲み込めた。そのままへなへなと地面に座り込みそうだった。「じゃあ本当に結婚してくれますか？」「いいわよ。」「ありがとうございます！」、平太は田舎者丸出しに、直立不動で最敬礼していた。

さてそれから2週間後、2人は再び台の山公園のブランコの前に居た。今度は結婚式を挙げるためである。平太の友人に博報大学の知り合いと牛丼屋の店長とあと数人、アイさんの友人にタクシー会社の営業所長とあと女友達幾人かの、少人数での青空結婚式である。歌の通りの「普段着のドレスと若草の髪飾り」であった。司式には知り合いの牧師さんが立ち会ってくれた。

「山田平太君、あなたはこの女性を大切に生涯の伴侶とすることを誓いますか？」「はい誓います。」「川原愛美さん、あなたは雨の日も風の日もこの男性に一生を託すと誓いますか？」「はい誓います」。そして牧師は「この2人の結婚を認めます。末永く神のご加護があらんことを」と宣言すると、教会から持って来た鐘をカランカランと鳴らした。そして友人たちがこぞって拍手をしてくれた。

その時たまたま3組ほど、近所の家族連れが公園を散歩していた。そしてこの見慣れない光景にまず子供が「お母さん、あの人たち何をしているの」と聞くと、親の方が「結婚式なの」と子供に教えていた。そしてこの通りがかりの人たちも、一緒に拍手して祝福してくれた。

これで2人は正式に結ばれた。新居は平太が愛美の部屋に転がり込むことになり、話し合いの結果2人は愛美の苗字を名乗ることにした。山下平太は今日から川原平太である。付き合い始めてから半年、それが長かったのか短かったのかどちらかは分からない。でも2人はあたかもあの初めて会った日にブランコで夜が更けるまで話をした、それが夜の明けるまで続いて今夜明けの星を掴んだのであった。

1年ほど後に2人に子供が生まれた。男の子であった。2人は彼らを結び付けてくれた台の山公園にちなんでその子を「台」(だい)と名付けた。川原台である。かつて春

夜明けの星（短編）

原先生が言ったように2人はこれからも育児とか教育とか、色々な人生の起伏があることだろう。2人とも外見上は何も変わっていない。愛美は従来通りタクシーの乗務員であり、平太は近所の牛丼屋でバイトであった。だが2人とも何も心配していなかった。

あの日牧師が鳴らした教会の鐘が、今でも鳴り続けているかのようであった。
（おしまい）

この短編は、長澤まさみと松坂桃李の主演で映画化されることになりました（言うまでもなくもちろん冗談です）。